

①<P.61 下から4行目～P.62 下から9行目>

100万ウォンの小切手を出しておつりを受け取って出ていったお客さんがまた現われたのは、その後まもなくだった。「この計算はどの女がやったの？」〈どの女〉なんていう言い方を、彼女は平気で口にした。それが意味する対象が私だということがピンとこなかった。「どうなさいましたか？」Rが私をかばって前に出た。「あなたじゃないでしょ、あそこのあの子が計算したんでしょ」「彼女はうちのアルバイトなんです。私におっしゃってください」「何よ、なんであんな基本もなってないアルバイトを使ってるのよ。中学も出てないわけ？こんな足し算引き算もできないの？」確かに基本もなってないアルバイトに違いないので、私は頭を深く下げていた。「申し訳ございません。私がすぐに計算し直します」Rが何度も頭を下げた。約4万円をどこからか補填したようだった。不足分のお金を受け取ったお客さんは私を一度にらみつけて、マネキンの首にかけてあるスカーフをもぎ取った。「腹が立ってこのまま帰るわけにはいかないわ。あのバカ娘のせいでここで時間をすごく無駄にした代わりに、これをもらっていかなきゃ気がすまないわ。あの娘の日当から減らすなり何なりしなさい」Rがお客さんの手からスカーフを奪い返した。「お客様、これは差し上げるわけにはまいりません。他の記念品を差し上げますので」お客さんはまたスカーフをもぎ取って声を荒げた。「誰がそんな記念品なんか欲しいもんですか。私はこれが気に入ったからもらって言うてるのよ」

②<P.66 上から7行目～最後>

小さくて不完全な銀色の鍵が机の引き出しの一番下の段に入ったまま、10年が過ぎた。セロテープや糊などを急いで捜すときに、思わずその引き出しを開けることもあった。Rからは一度も連絡がなかった。Rと私のポケベルの番号はもう地上から消え去った。人々はポケベルから携帯電話へ、アイ・ラブ・スクール（卒業後の消息が分からない同窓生を探すインターネットサイト）からミニホームページ（ブログのような個人のホームページ）へと次々におもちゃを換えた。

この文章を書き始めてから、私はサイ・ワールド（韓国最大のソーシャル・ネットワーキング・サービス）の〈人探し〉のサイトでRのミニホームページを探してみた。Rと同じ名前で1972年生まれの女性は全部で12人いた。一人ひとりクリックしてみた。12人のRはほとんどみんな忙しいようで、ミニホームページを整備していなかった。満33歳。とても現実的に生きている時期だ。11番目のRのミニホームページに入ると、トップに女の子の写真があった。3歳か4歳くらいだろうか。私は写真を拡大して、しばらくじっと見つめた。女の子の目は大きくて賢そうだった。よく見ると丸いあごのラインもRに似ている気がした。もっとわかりやすい写真を見たかったが、写真はその1枚だけだった。その子がRの娘であることを、私は心から願った。

変わったこともたくさんあったし、変わらないこともたくさんあった。三豊百貨店が崩れた場所はしばらくの間空き地になっていたが、2004年に超高層のテナント入りのマンションが建った。そのマンションが完成する数年前、私は遠くに引っ越した。今でもたまたまそのマンションの前を通るが、胸の片隅が痛むこともあるし、そうでないこともある。故郷というのは必ずしも、とても懐かしい場所だとは限らない。故郷を離れてはじめて、私は文章を書く気になったのだ。

（翻訳資料集より）